

見えし物を、いつの年よりか絶しと問へば、さだかに答る人だになし、誰が方に靡果ナガラてか富士の

根の煙の末の見えず成らむ、古今の序の詞まで思出れて、朽果し名柄ナガラの橋を造ばや富士の烟も立すなりなば、と云り、然れば此頃復既に絶たるなり、佛尼と云る人の訴事有て、建治三年十月の頃に、鎌倉へ下る、時のを弘安三年に記れたる物なり、又父朝臣に云々とは、續古今集に思事侍比父平度繁朝臣の遠江國に罷けりに心ならず併て、鳴海の浦を過とて詠侍ける、さとも我いかになるみの浦なれば思方には遠ざかるらむ、轉寢記にも此歌見えて、後の親なりと人遠江より上たるかへされに誘れて下し由見えて、父とは平度繁朝臣にて云々と云て詠侍ける、さく人説りき、玄道云、轉寢記に、富士の山は惟こゝもととにぞ見ゆる、雪甚白くて心細し、風に靡く烟の末も、ゆめの前に哀なれど、うへ無き物はと思けつ心のたけるぞ物悲かりけると有は本文に能符れど、十六夜日記に爲守主より立けむ、とある返し、かに立別れても子を思ふもひを富士の烟を見ても尙とぞ見し、と有はいかにそひ知と云に、京にて知ず詠に詠るに、知られしにて、共に謡歌なればなり、又海道記は、誰人の作にや間きつる富士の烟は空に消て雲になごりの面陰ぞ立つ、と云歌も見ゆ、さて源賴朝の事を富士野狩の古圖に、も、烟の立状を畫けりと、或人も説ひ、平家物語、曾我物語にも、富士の烟を見ゆる事、とぞ見し、と有はいかにそひすし、新古今集にも、西行が、風に靡く富士の烟の空に消え、と有を知らぬ我心かも、其比また燃し事、知道すが、富士の烟も、わがざりき晴るまもなき空のけしきに、と有を知らぬ我心かも、其比また燃し事、知道するめり、詞林採要抄に、俗傳に云、昔は此山も、ゆる事甚くして、火照天に上り、黒烟日を隠し、磐石を降し、熱湯をながし、隣國鳴動して草木枯渴、東作西收、民の愁有けりが、清和天皇御宇貞觀年中より、此煙絶て立すと云り、其昔の焼石、此山の四方の麓に、數十里に及て充満り、于今是より在中之云時、知ぬ富士の煙も秋の夜の月の爲にや立すなりけむ、と記せるは、甚疎考なり、是より後の物にては、宗良親王の李花集に、浮島が原を通て車返と云し所より、甲斐國に入て信濃へと心ざし侍しに、然ながら富士の麓を行廻侍り字なししかば、山の姿、いづ方よりも同様に見えて、誠に類なし、北になし、南になして今日いくか富士の麓を廻きぬらむ、新葉集には、行信濃へ、富士の物に、富士の山をふり見る雪せば、消せざる霞こめ、と、時を知りぬ山ばと、燃もし更に見はえずしと、見はえずしと、見はえずしと、見はえずしと、